会員通信

釧路市における二つの水産関連顕彰碑　余禄
―釧路のマグロ漁業と川崎船―

野村哲一

前報までに、釧路開発の功労者とされる佐野孫右衛門(注1)と釧路の水産業の父と呼ばれた嵯峨 久(注2)の顕彰碑を紹介したが、これらの碑を調査したなかで、釧路のマグロ漁業に関する興味ある資料に接したので、紹介したい。

釧路市立博物館（釧路市春湖台1－7）の二階展示室壁面に、「大型の魚」が魚市場と思われる場所に整然と並べられ、多くの人がそれを見守る一枚の写真の複製が展示されている（写真1.）。この写真は、漁獲されたマグロ（クロマグロ）が釧路の市場に並ぶ風景（大正11年撮影）であった。

写真1.　漁獲され、市場に並べられた釧路のマグロ（釧路市立博物館蔵）。

釧路市においては、「鮪の釧路か、釧路の鮪か」と言われたほど、マグロが流し網漁により漁獲された一時期があった。それは、明治30年代末から昭和10年代までの30年余りの漁業であった。釧路の水産ではイワシ、サンマをまず思い浮かべ、現在の感覚では、北海道のマグロは津軽海峡周辺での漁獲程度で、「釧路のマグロ」とは意外な感じがした。

釧路市総務部地域史料室（2003）の「写真絵葉書で見る　遠い日のくしろ」には、「決して鮭ではない。釧路の市場に水揚げされた鮪が整然と並べられているのである」と説明のついた市場に並ぶマグロの写真、川崎船を背景に「鮪百万日本一、舳艫（じくろ）揃えて堂々と爆音いとも勇ましく行（く）手は遠き太平洋夜嵐烈しく波高く今宵は沖に波枕」との文言が左肩に記されたマグロの水揚げ風景、漁を終え帆走により帰港する川崎船、東京へとマグロを輸送する冷蔵船などの絵葉書が収載されている。爆音とは漁船の発動機の音のことであり、当時の川崎船がすでに発動機を装備していたことを伺わせる（釧路市総務部地域史料室,2003）。これらの絵葉書もまた、写真1.

と同様に、確かに「鮪の釧路か、釧路の鮪か」と言われた時代があったことを証明している。

川名（1934）は「鮪漁ト海況トノ関係ニ就テ」と題する報文において北海道の東部から南部の地域にある、釧路、厚岸、浦河、室蘭の大正末期から昭和初期のマグロ漁業の沿革や漁法、漁況について報告している。釧路の沖合にマグロが分布していた事は、航行する貨物船の乗組員の目撃情報や、サメ漁に従事する漁業者からの情報で明治末期から知られていた。明治38年（1905年）にはネズミザメの試漁でマグロが漁獲され、その有望性が報じられたり、建網でのマグロの漁獲が認められている。マグロの分布の情報が知られるようになって以後、明治40年（1907年）には38隻もの川崎船がマグロ漁に入漁している。

川名（1934）は釧路における大正10年（1921年）から昭和7年（1932年）におけるマグロの旬別、月日別漁獲高を報告しているが、緒言において、この統計の元になった記録は大正11年（1922年）から14年（1925年）は北海道水産試験場釧路支場の調査によるもの、大正15年（1926年）以降のものは、釧路のマグロ漁業の開発功労者嵯峨 久（注2）の努力によるものとしている。

釧路において最もマグロの漁獲が多かったのは昭和4年（1929年）であり（川名,1934、布施,1962）、川名（1934）によれば、2,997,852貫（約11,242トン）の年間漁獲量であったとされている。農林水産省の昭和四年第六次農林省統計表によれば、この年の都道府県別のマグロ漁獲量では、北海道は福井県に次いで全国2位の漁獲量となっている。

昭和4年（1929年）の釧路で漁獲された164,208尾の魚体のサイズ区分では、大に区分した体重20貫（75Kg）以上の個体が73,474尾（44.7%）、中と区分した10-20貫（37.5-75Kg）の個体が27,576尾（16.8%）、小と区分した10貫（37.5Kg）以下の個体が63,158尾（38.5%）であった（川名,1934）。漁期はおおむね6月下旬から11月下旬であったとしている。写真1．は大正11年（1922年）に撮影されたものであるが、漁獲量がピークであった昭和4年（1929年）には、大正11年（1922年）の約10倍の漁獲量となっており、その時の市場の様子は「東洋一の釧路鮪年産壹百万円（昭和10年頃）」と絵葉書にあるようにさらに壮観な状況であったと思われる。布施（1962）の釧路漁業発達史年表の昭和4年（1929年）の項には「鮪流網漁場最盛の年で三百万貫以上の水揚げとす。ために鮪魚粕となるものあり」との驚くべき記述もある。

漁獲されたマグロの流通に対応するため、この時期には嵯峨　久らの尽力により、生産者により設立された三鱗共同魚菜市場が市場業務を開始し、流通システムの整備・充実が図られた。漁獲されたマグロの90％は鮮魚で本州へと冷蔵船で輸送され、青森、塩釜から鉄道により東京へと出荷された。全盛期には、釧路港の水揚げ金額の実に40.4%をマグロが占めていたという。

このマグロも昭和10年（1935年）ごろから急激に漁獲が減少し衰退期となる。その理由については、北海道水産試験場の報告等により、海況の変化によるものとするなど諸説がある。現在は、北海道水産現勢によると釧路の漁獲統計にはマグロは見られなくなっている。

さて、「鮪の釧路か、釧路の鮪か」といわれた釧路のマグロ漁を支えた川崎船とはどのような漁船であったのであろうか？

川崎船は、カワサキ、カワサキ船と呼ばれることもあるが、名前は福井県川崎村（現坂井市三国町）で初めて造られたことに由来するという説、河口部分で建造されたことに由来する説、出稼ぎ漁民である川崎衆（林,1971）とともに分布を拡大したためとする説など諸説があり定説はないようである。船体の大きさは長さ7.5 ～ 12m、総トン数3トン余りであり、乗組員は6名が普通で、8名ほどの場合もあった。動力はなく、帆と艪により推進する無動力船であり、最後の最大の無動力船ともいわれている。船足も速いことから1-2日間の航海での沖合漁業にも使用が拡大していった。北海道の漁業では、釧路に限らず川崎船の導入は漁業効率の向上に大きな効果があった（長谷川,2018、赤羽,1998）。明治から長期にわたり続いてきた漁民の北漸移動と極めて関連の強い漁船であるとされている（林,1971）。写真1.と同じく釧路市立博物館二階展示室にほぼ実物大の川崎船が展示されている（写真2.）。この船体は、建造後実際に釧路川を走行した後、市立博物館に展示されたものである。現存する川崎船はないと思われるが、北海道内では、釧路市立博物館、厚岸海事記念館、利尻町立博物館等に実物や模型が展示されている。川崎船には越前・越中・越後・庄内など

の諸型があるが釧路のマグロ漁業で使用されたものは越後型であり、展示されている船体も越後型とされている。

写真2.　釧路市立博物館に展示されている川崎船。ほぼ実物の大きさである（釧路市立博物館蔵）。

川崎船の釧路地方への導入は明治21年（1888年）に越後から手繰漁法で鱈漁を行うために導入されたのが始めとされ、明治34年（1901年）になると川崎船を使用する越後漁民により漁場は拡大し、漁獲も増加を示す。川崎船は当時の漁船としては大型で、船足も早かったが、沖合でのマグロ漁業への使用には動力を装備していないため能力不足であった。大正2年（1913年）8月にはマグロ漁から帰港する船が、時化のため釧路港を直前にして18隻が遭難し、63名が亡くなる大きな海難事故にも遭遇している。

布施（1962）は釧路におけるマグロ漁業の発展過程を、大正三年までを黎明期、以後の大正年間を成長期、昭和六年までを全盛期、以後を衰退期と区分している。黎明期で活躍したのはこの川崎船であり、以後の成長期には川崎船に動力を付けた改良型川崎船とも言うべき漁船が、マグロ漁の拡大と、大正2年（1913年）の海難事故を教訓としての安全操業に貢献するようになる。

川崎船の定義が無動力船であることを重視するなら、動力を付けた船はもはや川崎船ではなく、「川崎船によりマグロ漁が拡大した」とすることには異論があるであろう。蟹工船やさけ･ます母船式漁業に関する記述でも「川崎船」の名が出てくるが（宇佐美,2013）、これも動力船であり、赤羽（1998）は母川式漁業で使用された動力付の船体が最後の川崎船であるとしている。

動力付きの漁船の増加以後、釧路のマグロ漁業は、布施（1962）に区分された成長期そして全盛期に入る。この、成長期に入った大正9年（1920年）ごろには、釧路沖が全国有数のマグロ漁場と認識されるようになり、遠く富山、岩手、宮城県から出漁してきた回航船（外来船）が地元船を上回ほどに増加した。釧路港がマグロ流通の基地となっていく。

釧路市立博物館のマグロ漁業に関する写真と川崎船の展示から見えてくるものは、釧路の水産業発展のためにマグロ漁業が果たした役割である。布施（1962）は、マグロ漁業の果たした役割として、本漁業への着業により漁船の動力化が完成したこと、鮮魚流通機構が整備されたこと、釧路港が外来船の漁業基地としての役割を明らかにしたこと、そして釧路の漁業を支える人的、技術的な側面で従来の房総や三陸に加え富山県漁民の加入により技術的広がりが見られたことを挙げている。まさに、水産都市釧路をマグロが築いたと言っても過言ではなく、「鮪の釧路か、釧路の鮪か」であろう。

本稿の作成に当たり、釧路市立博物館には写真1および写真2の展示物の撮影、公表に多大の便宜を図っていただき、有益なご助言を頂いたことを感謝申し上げます。

参考文献

赤羽正春. 1998. 日本海漁業と漁船の系譜. 287pp, 慶友社. 東京.

布施　正. 1962. 釧路の鮪漁業. 釧路漁業発達史. 釧路叢書, 第4巻, 125-355. 釧路市.

長谷川英一. 2018. 明治時代の静内にみる漁業の振興-北海道命名150年によせて-. 楽水, 863, 49-51.

林　英雄. 1971. ものいわぬ群れ-地方史物語（東国篇）-, 54-76, 新人物往来社. 東京.

川名　武. 1934. 鮪漁ト海況トノ関係ニ就テ. 北海道水産試験場　水産調査報告, 第31冊, 1-80.

釧路市総務部地域史料室. 2003. 港町くしろ.写真絵葉書で見る　遠い日のくしろ. 釧路叢書,第35巻, 96-115. 釧路市.

宇佐美昇三. 2013. 蟹工船興亡史. 293pp. 凱風社. 東京.

注1　釧路市における二つの水産関連顕彰碑（1）佐野孫右衛門「佐野氏紀功碑」.JFSTA NEWS. No.53, 1-3ページ.

注2　釧路市における二つの水産関連顕彰碑（2）漁業功労者嵯峨 久「頌徳碑」.JFSTA NEWS. No.54, 4-6ページ.